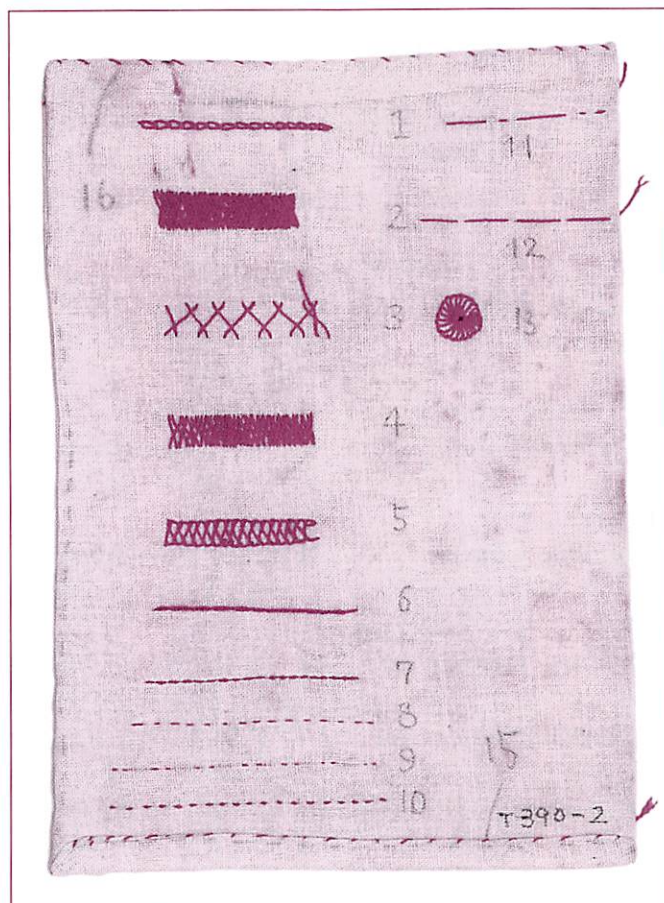




北方民族博物館だより

No.75



縫い方見本（ニブフ）
登録資料番号T390
昭和16（1941）年頃

言語学者服部健氏の旧蔵資料のひとつ。白い木綿地に赤糸で15種類のステッチが示されており、縫うときの技法と刺繍の技法が含まれている。

赤い刺繍糸で施されたサンプルの横には番号が付けられており、これに対応した記録も残されている。例えば3番は布のほか、白樺樹皮細工の際にも使われるステッチであり、5番はニブフの刺繍文様によく使われるステッチで、周辺のウイльтаやアムール流域のナーナイでも見られる。

- 1 表紙 刺繍技法見本
- 2-4 第24回北方民族文化シンポジウム
- 5 講座 北方領土の自然と人びと
- 6 アイヌ文化講習会／環オホーツクの民族音楽事情
- 7 北海道民族学会研究会／北海道博物館紀行・財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 8 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第24回北方民族文化シンポジウム

現代社会と先住民文化① ー観光、芸術から考えるー

2009.10.7、10.17-18

オホーツク・文化交流センター(エコセンター2000)

今年のシンポジウムはテーマを新たに「現代社会と先住民文化 ー観光、芸術から考えるー」とし、初回は観光の場での先住民とその文化の関わりを取り上げました。国内外の先住民文化の継承者、博物館職員、ツアー・コーディネーターや研究者といったさまざまな立場から、実践例や提言をご発表いただきましたので、以下に概略を紹介します。

●第1部<モンゴル、カムチャツカでの新たな観光>

座長：中田 篤（北海道立北方民族博物館学芸員）

渡部 裕（北海道立北方民族博物館学芸主幹）

「カムチャツカにおける先住民観光の現状と課題」

カムチャツカ半島が外国人旅行者に解放されたのは1992年で、観光の歴史は長くないが、ユネスコ世界遺産に登録された火山群を含む自然とともに、先住民文化を対象とした観光も人気がある。イテリメン、コリヤーク、エベンの民族文化を紹介するため、各地に再現された「民族村」では、踊りや料理などの体験ができる。また、先住民のつくるビーズや毛皮を使った工芸品や彫刻品などの土産も、観光の重要な要素になってきている。それらによって得られる収入はもちろん大事であるが、文化を若い世代に伝える場として一定の役割を果たしており、外国人のみならず、国内の民族文化理解の役割も持ちつつある。一方、旅行業者の理解不足や通訳の誤解を招く説明、さらに立ち入り規制など課題も少なくない。



西村 幹也氏

（NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがぁ理事長）

「モンゴルを知る観光 スタディーツアーの現場から」

社会主義時代のモンゴル国の観光は「草原地域の遊牧民たちも独自の文化を維持しながら幸せに生活している」ことを喧伝する政治的プロパガンダとして始まったように思われる。資本主義経済に移行した1990年代になると日本からもツアーが生まれ、発表者は学生時代に添乗員として参加したが、モンゴル側が派遣する通訳・ガイドの質や、料理、遊牧民の暮らしについての説明がないなど、気になることが多かった。それで、モンゴル文化の担い手である遊牧民を主人公とし、モンゴルの今の姿を知る観光を自ら企画・運営している。草原での暮らしを続けながら収入を得る手段の一つとして、また、日本人にとっては異文化であるモンゴルとの関わり方を自身で見つけてもらう手助けができればと考えている。

●第2部<観光と民族の間>

座長：大島 稔氏（小樽商科大学言語センター教授）

イーサン・ベティクルー氏

（アラスカ先住民文化センター文化教育プログラム副部長）

「アチガリヒ：教えること／学ぶこと」

夏の観光シーズン中、民族文化を紹介するガイドのインターンとして先住民の青年を雇用している。そのために、オフシーズンには文化的集中プログラムを組み、生業の技術や工芸などを学んでいる。さらに伝統的な文化ばかりではなく、民族間で異なるコミュニケーションの方法について学習することが大事である。ガイドと来客の間では、ことば以外にもアイ・コンタクトや声の大きさ、応答の間合いといった文化的な違いによって、誤解が生じることが少なくなく、それは互いにストレスであり、青年たちには苦手意識や緊張をもたらす。違いを知り、訓練をすることで、より理解しあえる関係づくりを目指している。

秋辺 日出男氏

（世界先住民ネットワークAINU事務局長）

「観光とアイヌ民族」

発表者が生まれ育った阿寒湖温泉のアイヌコタンは、1950年代後半に観光で自立するために新しくつくられた集落である。かつて観光は、物見遊山でくだらないものと批判されてきた向きがあり、それに携わるアイヌも、仲間内から「文化を売り物にする」「さらし者で恥だ」とさえ言われたこともある。戦後の北海道観光ブームはアイヌの就業のチャンスであり、多忙ななかで自分たちのあり方や観光の将来に対するビジョンをじっくり考えられないまま

突っ走ってしまったという反省がある。時代は変わり、旅行が珍しいことでなくなり、土産もあまり買わなくなった今、それを逆手に、エコツーリズムなど新しい旅行形態でかつ民族文化の理解や地域貢献に資する方法や、アートとしてレベルの高い物づくりに取り組むチャンスと考える。アイヌが主体性を持って、伝統と発展を調和させた観光を提供すれば、民族理解から世界の平和へとつながる可能性も持っているのである。

なお、1日目の博物館の視察の前（第2部の最後）に、当館の角達之助学芸員が、開催中の特別展の趣旨等についても説明を行いました。

●第3部＜博物館と観光＞

座長：岡庭 義行氏（帯広大谷短期大学准教授）

村木 美幸氏（アイヌ民族博物館副館長）

「博物館活動と観光 ―アイヌ民族博物館の事例から」

アイヌ民族博物館のある白老町は、地の利を得て観光客が多く訪れている。明治14（1881）年に天皇がイヨマンテ（熊の霊送り）と踊りの見学をしたことが、観光の契機とも言われる。大正から昭和初期には観光地として多く紹介される一方、歌人の遼星北斗の歌などにも見られるように「見世物」である、「差別を増強する」などの批判を浴びていた。こうしたアイヌ観光の否定は、その後、民族文化の伝承・保存や研究、教育などを総合的に行なう社会教育施設としての「アイヌ民族博物館」開設への原動力となった。発表者も、勤務を始めたばかりのころは、来館者の無理解な発言などに戸惑うことがあったが、今は無関心よりは疑問を持ってくれるほうが良い、少しの興味でも、積み重ねによってアイヌ民族に関する情報を増やしていきたいと考えられるようになった。

リーシャ・デビス氏（キャンベルリバー博物館館長）

「現代にとっての伝説の意味 ―キャンベルリバー博物館が分かち合う先住民文化」

カナダ・バンクーバー島にあるキャンベルリバーは、サケが豊富なことで知られており、北海道石狩市と姉妹都市であるが、網走とも共通点が多い。周辺には、1万年にさかのぼる時代から異なる言語を有する多くの先住民が暮らしてきた。博物館では、それらの先住民文化、歴史とともに、ヨーロッパからの移住者がつくった地域の産業などについても展示をしている。博物館は来館者が増えることを望んではいるが、観光客をひきつける先住民のアートや神話などをドラマチックに紹介するだけでは、バランスを欠いている。メイン展示として仮面を用いて神話を紹介するシアターがあるが、物語の所有権や真正性に配慮し、撮影は禁じている。また、先住民の言語での表記など、非先住民の観覧者には戸惑いや難しい印象を与えるかもしれない。一方、ミュージアムショップで、地元アーティストの作品の販売などもしている。先住民に敬意を払い、共同で

展示や解説プログラムなどを企画しながら、その文化を地域住民や観光客と分かち合う取り組みを進めている。

コメント 山崎 幸治氏

（北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教）

お二人の発表のなかから、特に関心をもったものを取り上げてコメントする。キャンベルリバー博物館は、多くの先住民が住む地域に存在しながら、運営者は先住民ではないことから、さまざまな難しい問題を抱えているが、真実・誠意・敬意をもって取り組む様子は、ある意味で同じ境遇にある自身にとって参考になった。一方、白老のアイヌ民族博物館はアイヌ自身が運営する博物館であるが、アイヌの地域差を考慮しない観覧者に一律なアイヌ文化イメージを与える危険性をはらんでいることから、白老地域の伝統文化だけを紹介すればよいというわけにいかず、学芸員の気配りには相当なものがあることを知っている。「誰が、何を、どのように表象するか」の「誰」と「何」の多様性の折り合いをどうつけるかがポイントである。さらに、観光の場においては、客に満足感を与えることが求められるが、リアリティに裏付けされた見せ方にヒントがありそうだ。



●第4部「オセアニアでの多様な観光」

座長：高倉 浩樹氏（東北大学東北アジア研究センター准教授）

深山 直子氏

（日本学術振興会特別研究員/お茶の水女子大学）

「ニュージーランド先住民マオリにおける観光の在り方」

ニュージーランドでは1840年代から観光業が発達し始め、「Natural Wonderland（自然豊かなふしぎの国）」というキャッチフレーズで語られてきた。観光資源は「壮大」で「特異」な自然と、「伝統的」で「エキゾチック」なマオリ文化であり、当初からマオリ文化は注目されてきた。しかし、それは観光客の期待するマオリ文化の担い手・紹介者として関わってきただけであり、マオリが主体的に観光業に携わるようになったのは、1960年代以降、マオリの権利回復運動が高揚し、80年代以降に諸資源の返還や補償が進むなかでのことである。今回紹介するオークランド市で行われていた「パー・アンド・ストライド」という

1～2時間のガイド付き散策ツアーは、都市ならではのメリットとデメリットがある。壮大な自然はないが、身近な公園にもマオリが暮らし受け継いできた文化を感じられることや、オークランド博物館の来館者を集客できる可能性などである。しかし、観光客もガイドも安定した確保ができないなどの理由で今年は中断されており、課題は少なくない。経済利益とともに自文化理解・意識高揚などの意義もある観光が、玄関口であるオークランドで再開することを願っている。

窪田 幸子氏（神戸大学大学院国際文化研究科教授）

「アボリジニのオルタナティブ観光とその意味

ーアーネムランドでの試みから」

オーストラリア先住民のアボリジニは、人口割合が3%に満たないにもかかわらず、現在、国家のアイデンティティの一部として重要な位置を占めるようになってきている。それは、1970年代以降、アボリジニに対する政策が変化して先住民としての権利回復が進み、アボリジニの文化が社会的に評価されるようになったことによる。特に美術は国際的評価が高まり、それに伴って観光におけるアボリジニの重要性も増してきている。オーストラリア最北部のアーネムランドは首都から遠く、アボリジニ領であるため個人観光には制限もあるが、エコ・カルチュラル・ツアーやアボリジニ美術鑑賞・購入ツアーなどは一定の観光客を呼び込んでいる。今回紹介するのは、それらとは一線を画した年に一度の滞在型キャンプで、踊り、音楽、狩猟採集などの多様な、より「本物」の文化に触れる文化学習キャンプと、アボリジニ社会の法（独自の紛争解決儀礼とその理念）を理解する目的で開催されるキャンプの二つである。これらは、費用も高く、遊びの要素は少ないが、参加者には好評を博している。こうしたオルタナティブ（代替的）な観光の事例は、アボリジニ文化への期待とあこがれ、アボリジニ自身の主流社会への対応力の伸長などとともに、国際的な先住民にかかわる言説の拡大など先住民をめぐる現代の状況を象徴しているといえる。

＜総合質疑・討論＞

各セッションの座長からそれぞれのまとめのあと、補足する発表や質疑応答などが行われました。各地の先住民と観光の歴史には似た時代背景や歩みがあり、先住民自身が運営しているか否か、所属する団体や立場の違い、地域などを越えて、共通する課題があることが明らかになったように思われます。

詳細は、年度末に刊行予定の報告書をご覧くださいと存じます。



シンポジウムに先駆け、関連事業として10月7日（水）に北方民族音楽コンサート「カンテレ・馬頭琴の夕べ」を開催しました。カンテレ奏者のあらひろこさんと喉歌&馬頭琴奏者の嵯峨治彦さんのユニットRAUMA（ラウマ）の演奏で、フィンランドやモンゴルの伝統曲、オリジナル曲、ソロや歌も交えた14曲が披露されました。平日の晚にもかかわらず、約250名と予想を上回る来場者がありました。お礼を申し上げるとともに、プログラムの不足や、椅子を追加するなどで開演が遅れ、多くの皆様にご迷惑をおかけしてしまいましたことも、併せてお詫びいたします。

（学芸グループ 齋藤玲子）



講座

北方領土の自然と人びと

(共催：網走管内博物館連絡協議会)

2009.9.26

特別展開連事業として、1999年から2008年まで、北方領土で継続的な生態系調査を実施してきたお二人の講師をお招きし、講座を開催しました。なお、この講座は当館の教育普及事業としてはもちろん、網走管内の博物館関係職員にとっても関心が高いテーマと考え、網走管内博物館連絡協議会の研修に位置づけました。以下に概要を紹介しします。

「北方領土における自然生態系の変化

～その現状と問題点～

講師：小林 万里氏（東京農業大学講師

・NPO法人北の海の動物センター理事）

北方領土周辺海域と北海道のオホーツク海域は、世界で最も南の流水域にあたり、同海域の海洋生物はもちろん周辺の陸上の生物も、流水によって育まれてきた。冬にアムール川からオホーツク海へ淡水が流入すると、海中に塩分の濃淡による海水の層ができ、濃度の薄い海表面は凍り、次々と流水となる。一方、海水下の養分は、海流の鉛直循環とともに循環し、プランクトンの発生を促す。このプランクトンを求めて魚類が大群で来遊し、それを餌とする海鳥類や海獣類が集まってくる。また、サケやマスなどは川へ遡上することで、ヒグマやエゾシカ、植物などの陸上生物にも海の養分を仲介する役割をになっており、この地域は海陸ともに高い生物生産性と豊かな生物多様性を有する。



ただし、この豊かな生態系は流水によってのみ維持されてきた訳ではなく、ソ連（ロシア）による保護活動も重要な役割を果たしてきた。ソ連（ロシア）は、北方領土の陸地面積の7割、沿岸海域の6割に禁猟区や保護区を設定し、海産物や陸獣類の捕獲、植物の採取や伐採などを制限し、加えて島々の大部分に立入制限を設けるなどの保護政策を半世紀以上にわたって継続し、生態系を維持してきた。このように陸上保護区とともに海洋保護区を設けて2重にすることで、海陸における養分の循環が阻害されないようにしてきた。

しかし、近年、海産物の乱獲や密漁、密猟の横行などに伴い、その豊かな生態系が破壊されつつある。

「ヤミ経済からの脱却～知床世界遺産の拡張構想」

講師：本間 浩昭氏

(NPO法人北の海の動物センター理事)

小林氏の解説によって紹介された当地の原生的で豊かな生態系が、人間の経済活動によって汚染されつつある状況を紹介する。

ソ連崩壊（1990年12月）

以前からはじまったカニ、ウニ、ナマコなどの乱獲は、



北方領土周辺海域を今や「豊穡な海」から「枯渇の海」へと変貌させている。ちなみにこれら乱獲された海産物の主な輸入先は日本である。また、近年のロシア経済の好調によって、北方領土や千島列島全域では空港、港湾、道路、地熱発電などのインフラ整備、さらに外国資本による養殖漁業、観光産業を導入する計画が進行しており、大量の樹木が伐採され、動植物の生息圏が冒されつつある。

これら海産物の乱獲や密漁、経済成長に伴う土地の開発ラッシュが、資源の枯渇を加速化させているのは明らかである。流水によって生産された養分を、海陸で循環させ豊かな生態系を維持してきたこの地域で、ひとたび人間の都合を優先させればあっけなくそのバランスは崩れ去ってしまうことは容易に想像できる。

このような事態を防ぎ、現在崩れつつある北方領土の生態系を復元、保全するためには、莫大な資金や長期保全のための技術と実行力が必要となろう。そこで、世界自然遺産知床をウルップ島にまで拡大し、流水が育むこれらの地域を日ロが共同で管理保全し、密漁・密猟などを防ぐ仕組みをつくるのが有効と考える。またこのような連携を通じて、両国民の領土問題解決への意識を高めることが可能となるであろう。

北方領土を人間のみでなく、そこに生きる生物の共有財産とする両氏の講演は、参加者に人間本意ではない視点で領土問題を考えるきっかけを作ってくれたように思います。

(学芸グループ 角達之助)

アイヌ文化講習会

木彫り入門

～アイヌ文様を彫る～

2009.9.5

講師 西田 正男氏・床明氏（阿寒アイヌ工芸協同組合）

例年、アイヌ文化を体験的に学ぶ講習会を開催していますが、今年は初めて木彫に挑戦しました。当館で以前にもムックリ（口琴）の製作と演奏を指導いただいた阿寒のお二人に指導していただきました。

まず、最初に西田氏からアイヌ民族の樹木に対する考え方や、使い分けなどについてお話をいただきました。アイヌ語の木の名前や、人間にとって有用なものとそうではないものといった理由や生態から、木の性質の善し悪しが伝えられていることなどを教えていただきました。

その後、実習に取り掛かりました。10種類以上の文様の見本のなかから、彫ってみたいものを選び、表札大のシナノキの板（17.7×12.5cm）に写しました。このとき、見本のままではなく、文様をうまく組み合わせて、オリジナルのデザインを描いた参加者もいました。

そして、初心者向けの彫り方として、文様の線に沿って三角刀で筋をつけ、内側を丸刀で彫り進めたり、花びら状の文様をつけたりしました。また、切り出しを使って、鱗文様に挑戦する人もいました。板は黒い塗料が塗られており、彫った部分は白い木肌が出てきますので、その白黒のバランスが美しさのポイントです。

市内の木彫サークルの会員も、文様や技法の幅を広げたいと参加しておられ、慣れた手つきで、あっという間に片面を彫りあげ、裏に2つ目の文様を彫ったり、名前などを入れる方々もいました。一方、彫刻刀を持つのは、学生の時以来何十年ぶり…という人も少なくありませんでしたが、次第に勘を取り戻し、皆さん危なげなく彫っておられました。

完成品を手に記念撮影をしたのが、下の写真です。皆さん大切に飾りたいとおっしゃり、満足の笑顔でした。

（学芸グループ・齋藤玲子）



講座

環オホーツクの民族音楽事情

2009.11.7

講師 大島 稔氏（小樽商科大学・言語センター長、教授）
甲地 利恵氏

（北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員）

当初、谷本一之前館長が講座を行なう予定でしたが、7月に急逝されたため、谷本先生とともにカムチャツカ等で調査・研究を行なってこられたお二人に、同じテーマでお話いただきました。

前半は、甲地氏が「喉の音・息の力」というテーマでお話しされました。最初に、谷本先生が北方諸民族の芸能のキーワードとして「動物の擬声」「シャーマン」「太鼓踊り」を挙げておられたことを紹介し、さまざまな先住民族の音楽が、上記を含む共通の“北方的な”要素を備えており、それらの顕れ方の違いによって、各民族の特徴が語れると述べました。そして、先の3つに加えて「声の加工」「喉・息の音」「遊び（ゲーム・競争）」「自分の歌・家族の歌」といった共通点も挙げ、録音資料をもとに解説をしました。なかでも樺太のアイヌ語でレクッカラという、向かい合う二人が喉の奥から声を出しながら互いに息を口に吹き込む歌い方は、イヌイトやチュクチなどにもあることを紹介しました。息は生命の象徴ということができ、アイヌでは除魔の儀礼でも重要なものになっています。また、“アイヌ古式舞踊”がユネスコの無形世界遺産に認定されたことにも触れ、日本の中での珍しさを強調するのではなく北方へのつながりでもとらえるべきとし、さらに若い人々によって伝統に沿いながらも新たな創造として演じられることが期待される、と結ばれました。

次に大島氏からは、カムチャツカの先住民コリヤークを中心に、近隣の民族と比較をしながら、音楽が持つ意味についてお話しいただきました。たとえば、動物の声の模倣は、遊びのみではなく、オスがメスを呼ぶ声でトナカイを集めたり、乳を欲しがる子をなだめるなど実務的であることや、動物の物語の踊りの際に合いの手としても使われ、動物神を題材としたアイヌのユカラのリフレインなどとも類似していることを指摘されました。また、太鼓をとまなう歌や踊りがシャマニズムと関連することも説明しました。「歌の所有」については、谷本先生の研究成果からもグリーンランドからカナダ、アラスカ、シベリアにいたる民族に共通するもので、歌はもともと個人のものであるのが原初的な姿ではないかと述べられました。これらの音楽、特に歌は、超自然・あの世とこの世をつなぎ、家族をはじめとする人間関係を保ち、自己のアイデンティティーに関わるものとして欠かせないと締めくくられました。

（学芸グループ・齋藤玲子）

北海道民族学会・平成21年度研究会・網走大会

「映像に見る文化の諸相」

(共催：北海道民族学会)

2009.11.7-8

当館では、11月初旬の二日間にわたり、「映像に見る文化の諸相」をテーマに研究会を開催しました。研究会の目的のひとつは、当館が所蔵する映像資料を当館職員が積極的に紹介することでした。また、この事業は、北海道民族学会の研究会としても位置づけ、会員の方の積極的な発表を呼びかけました。発表内容は次のとおりです。

(1) 渡部裕(北海道立北方民族博物館)「ペレストロイカ以降のカムチャツカの先住民社会」：ペレストロイカ以降のカムチャツカ先住民社会のおかれてきた状況について、政治的経済的視点から報告した。

(2) 笹倉いる美(北海道立北方民族博物館)「ウイльтаの映像について」：ウイльтаに関する画像的記録の概要を紹介・上映するとともに、博物館が映像記録を行う意義について考察した。

(3) 加藤絢子さん(九州大学博士後期課程)「サハリン少数民族と国境」：1930年代以降の樺太庁予算関係資料をもとに、ウイльта、ニブフなどの少数民族の諜報活動起用について報告した。

(4) 中田篤(北海道立北方民族博物館)「タイガ型トナカイ牧畜の多様性について」：映像資料によってタイガ型トナカイ牧畜の事例を紹介するとともに、その多様性について考察した。

(5) 平田昌弘さん(帯広畜産大学)「遊牧の終焉」：映像記録の写実性と意義：遊牧民の生業の中心にある乳文化を取り上げ、映像記録の内包する写実性と映像アーカイブの意義について検討した。

(6) 大西秀子さん・石井智美さん(酪農学園大学)「パラグアイと日本の喫茶の比較」：日本とパラグアイの喫茶習慣を比較し、その共通点と相違点を検討した。

(7) 篠藤シルビア真弓さん・石井智美さん(酪農学園大学)「パラグアイと日本の食と健康観～栄養学的視点から」：日系人の立場から、両国の食と健康観について、栄養学的視点からの比較を試みた。

研究会には北海道民族学会・会員のほかに一般の方も参加されました。発表に対して、時には会員や一般参加の方からも質問が出され、熱心な議論になる場面もありました。

(学芸グループ 中田 篤)

北海道博物館紀行

北海道立埋蔵文化財センター

土偶のおはなしと土偶づくり

2009.11.14

講師：鎌田 望氏

((財)北海道埋蔵文化財センター普及活用課長)

「北海道博物館紀行」は、道内の博物館を紹介するものです。今回は、ロビー展

「縄文土偶国宝指定記念＜北海道土偶名品選＞」(11/7-11/2)でご協力くださった(財)北海道埋蔵文化財センターの鎌田望氏を講師に迎え、同センター



の活動内容や北海道で見つかった土偶について、展示解説を交えながら紹介いただきました。また併せて土偶づくりと勾玉づくりの指導をお願いしました。以下に概要を紹介します。

最初に同センターの活動内容と縄文文化期の土偶の特徴を紹介いただきました。同センターは旧石器時代からアイヌ文化期に至る専門家を有し、全道に分布する遺跡を調査、保存する施設として運営されています。また、調査によって得られた遺跡や遺物の内容を展示することで、先史文化の普及活動も積極的に行っています。

土偶の解説では、北海道では石狩平野よりも南側からの出土が多く、縄文早期(8000年～6000年前)からすでに作られはじめ、後期(4000～3000年前)、晩期(3000～2800年前)になると、北海道初の国宝となった著保内野遺跡の中空土偶のように、中が空洞の土偶が作られるようになることが説明されました。

体験メニューには、土偶づくりと勾玉づくりの2種類をご用意くださいました。

土偶は木古内町新道4遺跡出土の首飾りをした土偶がモデルでした。発泡スチロールで作った土偶の型におが屑粘土を埋め込み、細かな模様は竹串などを使って丁寧に付けてゆきます。

勾玉は、滑石を5種類の耐水ペーパーを使って削り、磨きをかけて完成させます。

どちらも丁寧にやればやるほど仕上がりが良くなるので、ほとんどの参加者が時間内にしあげることができませんでしたが、自宅で楽しみながら作り上げるという声を多く聞くことができ、満足いただけたようでした。

(学芸グループ 角達之助)

【企画展】カナダの民話をみる
～極北のイヌイト・アートを中心に～

会 期 平成22年2月6日(土)～ 4月11日(日)

会 場 北海道立北方民族博物館特別展示室

主 催 北海道立北方民族博物館

観覧料 無料

内 容 カナダ先住民に伝承される物語を表現した彫刻、版画、
仮面などの「もの」をとおしてその世界観を紹介します。

関連事業

講習会「版画で伝えるメッセージ」平成22年2月6日(土)

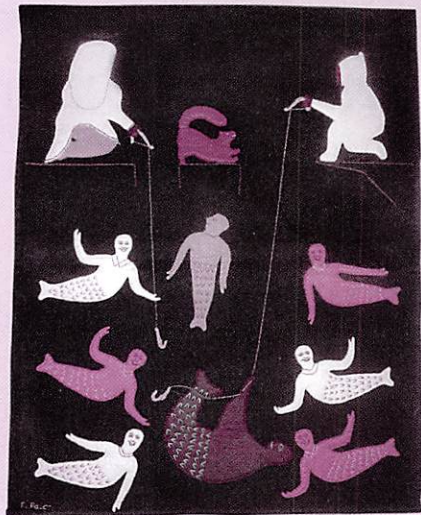
講師 田主誠氏(版画家・国立民族学博物館共同研究員)

「初級編～ステンシルでアート！」午前10時～12時

「上級編～木版画で絵手紙」午後1時30分～4時30分

企画展解説会 平成22年2月14日(日) ①午前11時～ ②午後3時～

解説 齋藤玲子(当館主任学芸員)



〈岩崎コレクション・壁掛け『海人のいたずら』
イヌイト 1979 H.K.Nalik 作〉

INFORMATION

はくぶつかん祭り

11月3日(火)に博物館の利用促進を目的に「はくぶつかん祭り」を開催し、約220名の参加がありました。

モンゴルのゲル建て、モンゴルの衣装体験、常設展示室クイズ等を行いました。

食のコーナーではボランティアが調理したボルシチや、地元「網走くじら協議会」協力のくじら汁、鯨焼き肉、職員が手作りのイモ団子を堪能いただきました。



行事報告

◆10月24日(土)にはくぶつかんクラブ「ピースでつくる北方のおまもり」(講師：中尾亜未解説員)を開催しました。

◆11月7日(土)に学芸員講座「サケ餃子づくりーカムチャツカのサケとペリメニ(餃子)」(講師：渡部裕学芸主幹)を開催しました。



◆12月12日(土)に学芸員講座「能取岬のオホーツク文化」(講師：角達之助学芸員)を開催しました。

避難訓練

◆10月8日(木)に毎年恒例の避難訓練を行いました。



北方民族博物館だより
No. 75

平成21(2009)年12月21日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者
財団法人北方文化振興協会